

令和元年6月28日現在

機関番号：83902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04857

研究課題名(和文)学童期・思春期の発達障害児地域育児支援：ピア・グループサポートの追跡研究

研究課題名(英文)Child-rearing peer-group-support in the community for the children with developmental disabilities : A follow-up study up to school age

研究代表者

幸 順子 (Yuki, Junko)

愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・教育福祉学部・客員研究者

研究者番号：20250251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、発達障害児の保護者(母親)によるピア・グループサポート実践における対話の検討を通して、児童期から思春期に特有の子育ての課題(親離れ・子離れ、障害の告知など)と支援のニーズ(学業の問題、仲間関係、不登校など)があることを見出した。
また、発達障害児の子育てにおける保護者主体の継続的地域育児支援の意義と、ピア・グループサポートにおける専門家の役割を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害児の保護者支援は、育児スキルを専門家から学ぶペアレント・トレーニングなどの考え方が大きな影響を持ってきた。しかしながら、本研究の15年に渡る継続的なピア・グループサポートへの追跡的参加・支援により、育児は親子集団という社会的関係の中で学び合い現実に直面し悩み考える中で育ち合うものであり、保護者が子どもや子育てのあり方について現実の中で主体的に考えることが大切であることが明確になってきた。また支援者(専門家)には、保護者が主体者として自己決定していけるよう、継続的に保護者と共に考える姿勢が求められることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study we have brought out problems in child-rearing of school age and needs of support through the analysis of dialogues in peer-group-support among parents of children with developmental disabilities. We examined the meaning of continuous child-rearing support led by parents in the community and roles of experts.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：発達障害児 育児支援 ピア・グループサポート 児童期・思春期課題 追跡研究 相互支援 当事者
主体 対話

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

発達障害児の育児は保護者の心理的負担が大きく、支援の必要性が指摘されてきた。専門家による早期支援に加え、保護者によるピア・サポートが支援の課題となっている。

ピア・サポートに関しては、「同じような悩みを持つ保護者グループによるピア・カウンセリング」等、保護者主体の環境設定の必要性、「親同士の懇談」「情報交換」「勇気づけとストレス発散」の場(親の会)の重要性などの観点からその意義が示唆されている。現在、厚生労働省が推進するペアレント・メンターは、そうした発想を取り入れた支援の一形態である。

育児におけるピア・サポートの実践は、一般乳幼児の地域子育て支援において広まりつつあるが、就園・就学後も支援を必要とする発達障害児の保護者支援、とりわけ「親からの心理的自立」という新たな課題を迎える学童期・思春期以降を見通した持続的で主体的なピア・グループサポートの実践と研究の蓄積は今後の課題である。

本研究において筆者らは、平成15年よりK市乳幼児・児童子育て支援施設が主催する「子育て教室」(事業開始は平成14年4月。子育てに困難を抱える親子の発達を支援するための親子教室。子どもは発達障害かその疑いと診断あり。月1回の頻度で開催)に参加し継続的に支援してきた。さらに平成22年、「子育て教室」参加者による自主サークル(主に学齢期以降の発達障害児と保護者の会。地域での交流と相互支援を目的として、月1回の保護者ミーティングや季節毎の親子行事を実施)の立ち上げを支援し継続的にサポートを行っている。共生の地域社会の実現には当事者の主体的参加が欠かせない。こうした経緯をふまえ、本研究では、学童期・思春期発達障害児の地域育児支援における保護者主体の継続的ピア・グループサポートの意義と専門家の支援の役割を検討した。

2. 研究の目的

本研究では、発達障害児の児童期・思春期の地域育児支援(保護者によるピア・グループサポート)実践の検討を通して、この時期の子育ての課題と支援のニーズを明らかにし、児童期・思春期の発達障害児の子育てにおける保護者主体の継続的な地域育児支援のあり方と専門家の役割を考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「子育て教室」開設の経緯と内容

開設時の状況

平成10年頃より、1歳6か月児健康診査後のフォローアップ教室に発語の遅れだけでなく、発達障害を疑われる子どもが増加してきた。県の児童相談所心理判定員の巡回相談により、子どもの育ちと子育てに不安や困難を抱える保護者同士が悩みを共有し、子育てを学び合う場の必要性が指摘され、K市の一事業として開設となる。

開設時期

2002(平成14)年度から実施。運営主体はK市。

開設目的

少子化や核家族などの家庭環境の変化により、子育てに不安や孤独感をもつ親が増えている。そのような中で、自閉傾向・多動・発語遅れ等の問題を抱えている子を持つ親同士の交流と育児不安の軽減を目的として、教室を開催する。

参加者

開設時は、おおむね1歳～6歳の、子どもの育ちと子育てに不安を抱える乳幼児の親子(親の参加者は主に母親)である。対象児のきょうだいを同伴の場合もある。後に学齢期の子どもの保護者参加もあり。1回の参加者数は、おおむね5～15組程度。自由参加。現在の来所経路は、保護者同士の口コミと乳幼児・児童子育て支援施設からの参加が主である。子どもが就園後は保護者のみ参加する場合もあり。2003年時の参加者の子ども(対象児)の年齢範囲は2～5歳である。

開催場所

・K市保健センター(2009年まで)、K市乳幼児・児童子育て支援施設(2010年以降)

教室の開催方法:

- ・自由参加(保健師、保育士、母親からの紹介)
- ・年間8～11回(およそ月1回) 午前10時～12時
- ・保護者、スタッフが車座になり、子育ての悩みや工夫、子どもの成長などを話し合い、保護者同士で育児を学び合う。

支援スタッフについて

・保育士 2名(2018年より1名)、保健師 1名(2009年まで)、心理(ボランティア)スタッフ(臨床心理士・臨床発達心理士) 2名、ピア(母親ボランティア)・スタッフ 1名～(2011年より) 託児ボランティア 1～3名程

「子育て教室」のプログラムについて(表1、表2)

就園・就学後の保護者のみの参加者が増加したことにより、2006年頃より状況に応じて、「体操・親子のふれあい遊び」などの子ども向けプログラムを省略した「親グループ学習会」のみのプログラムに変化した。

表1 開設当初のプログラム(2002年4月～2006年10月頃まで)

10:00~	体操・親子のふれあい遊び
10:20~	休憩タイム(トイレ、おやつ)
10:30~	親グループ学習会(親同士で子育ての学び合い)/子どもの自由遊び(託児ボランティア)
11:30~	スタッフミーティング(スタッフとボランティアスタッフで各参加者の課題を振り返る)

表2 現在のプログラム(2006年11月頃~)

10:00~	親グループ学習会(親同士で子育ての学び合い)/子どもの自由遊び(託児ボランティア)
11:50~	スタッフミーティング(スタッフとボランティアスタッフで各参加者の課題を振り返る)

親グループ(仲間による相互支援)の進め方について

支援のあり方としては、開始当初から、親主体の相互支援関係が地域において成熟することをねらいとした。専門家スタッフ(保育士・臨床心理士・臨床発達心理士)は司会進行を行うと共に、相互支援のファシリテーターとして、経験に基づいた母親同士の具体的な意見交換を促し、相互支援関係の支援に努めてきた。例えば、「どうしたらいいか」というような育児の方法論については、基本的には参加者やピア・スタッフの経験に基づいた発言を促し、参加者同士が子どもについての理解や子育てを互いに学び合い、その親なりの育児を行うようになることを目標とした。

会の記録と振り返りについて

毎回、参加スタッフ、参加者、開催時間、グループの話し合いの内容について、筆記により記録した。特に親グループの話し合いの内容については、逐語的に詳細を記録している。さらに、終了後、スタッフによる会(特にグループの話し合い)の振り返りを行い、発言内容をもとに参加者および子どもの成長発達の様子や困難、今後の課題を確認し合っている。

(2) 自主サークル立ち上げの経緯と内容

活動主旨: 多様なニーズのある子ども(主に学齢期以降)とその家族の交流を深め相互支援のネットワークを作ることを目的とする。

立ち上げ: 2010(平成22)年5月。「子育て教室」参加者(主に学齢期の子どもの保護者)によって立ち上げ・運営。立ち上げ当初のメンバーは10組の家族。(その後2018年現在まで、メンバーは20組前後を推移している。)

③ 参加者

おおむね学童期以降の支援ニーズのある子どもと保護者(主に母親)。1回の参加者は、2~10組程度。自由参加。

④ 開催場所

・K市乳幼児・児童子育て支援施設他

⑤ 活動内容について

母の会(月1回): 子育てについての話し合い

親子活動について(年1~2回、学校休業時):

卓球、ボウリング、物作りとゲーム、トランポリン、野外遠足、料理教室、バーベキュー(父親参加)、外食の会、映画鑑賞、理科実験教室、陶芸教室など

「子育て教室」への参加・ボランティア支援

要望書など要求実現のための活動、他の自主サークルとの交流など

⑥ 支援者(ボランティア)について

・臨床心理士・臨床発達心理士 1~2名

⑦ 自主サークル「母の会」の開催方法:

・自由参加(K市子育て教室参加者、母親からの紹介、口コミ)ただし、「子育て教室」からの参加者を受け入れるため、メンバーの誰か一人は必ず参加するようにしている。

・月1回(2010年度のみ「子育て教室」と合同開催) 午前10時~12時

・保護者、支援者が車座になり、日々の子育ての悩みや工夫、子どもの成長などを話し合い、保護者同士で意見交換、情報交換する。自主サークルの親子活動の計画、運営方法の検討など、定期的に運営についても会の中で話し合う。

⑧ 自主サークル「母の会」のプログラムについて(表3)

表3 プログラム(2006年11月頃~)

10:00~	親グループ交流会(親同士で近況報告、子育ての学び合い、情報交換)
12:00	

⑨ 「母の会」(仲間による相互支援;ピア・グループサポート)の進め方について

支援者(臨床心理士・臨床発達心理士など専門家)は会の一員として、基本的に毎回の参加に勤めているが、都合により不参加の場合もある。K市「子育て教室」と同様に母親同士の主体的な意見交換を尊重し、相互支援関係の促進に努めてきた。

⑩ 「母の会」の対話の記録について

毎回、参加者、開催時間、グループの話し合いの内容について、支援者が筆記により記録した。

4. 研究成果

グループの参加者の話し合いとスタッフによる振り返りの記録を元にこれまでの実践の経過

についてまとめると以下のようになる。

(1) 参加人数などの推移について (2002 年より)

育児教室の毎回の参加者については、2002 年～2005 年は、市の他の早期支援事業の充実と開催回数の減少により、延べ参加者は次第に減少傾向となったが、2005 年～2010 年 (自主サークル立ち上げまで) は、子どもの就園・就学後も参加を続ける保護者の増加により再度増加傾向となった。毎回の参加者数は、おおよそ 5～15 組の範囲を推移した。

2010 年以降はメンバーの多くが自主サークルへの参加に移行し、育児教室の参加者数は次第に減少傾向となった。おおよそ 5～10 組の間を推移し、2018 年現在は 5 組程前後を変動している。

一方、自主サークルの登録メンバーは、立ち上げ当初 10 組であったが、2018 年現在に至るまで 20 組前後を推移しており、毎回の参加人数はおおよそ 1～10 組の間を変動している。

(2) 保護者によるピア・グループサポート (「 子育て教室 」 と 「 母の会 」) の経過と展開

2002 年～2010 年までの親グループの経過の特徴をまとめると、以下のようになる。

2006 年頃から次第に、子どもが就園・就学後の参加者が増加し、「子育て教室」のプログラムは親グループの学習会 (話し合い) のみとなる。年少の子どもを持つ親の悩みや発言に対し、より年長の子どもが親が自己の経験を自発的に話す場面も増加するようになる。そうした親グループの成長を経て、2010 年には、「子育て教室」のメンバーによって、学齢期以降の子どもと親の交流を目的とした自主サークルが設立される。これ以降、主に乳幼児対象の「子育て教室」と並行して、主に学齢期以上の子と親を対象とした「自主サークル」のメンバーの運営による「母の会」(学齢期以降の子どもが親によるピア・グループサポート) が開催されるようになる。翌年からは、「子育て教室」と「母の会」は別日程で開催されるようになり、「母の会」のメンバーによる「子育て教室」への参加支援も行われるようになった。自主サークルは当初 10 組の親子から出発し、現在まで 20 組前後のメンバーで推移している。

(3) 保護者によるピア・グループサポート (「 子育て教室 」 と自主サークルの 「 母の会 」)

における話し合いの内容

「子育て教室」と自主サークルの「母の会」における、これまでの話し合いの内容について、項目にまとめると以下の通りである。

子どものこと：

子どもの近況 (家庭での生活、園・学校での生活の様子)

子どもの特徴等の理解について

子どもの問題行動、疑問や心配、気になること (興味関心、食の偏り、こだわり、好き嫌い、性格、ゲームへの熱中など)

子どもの成長発達 (言葉・認知発達・対人関係・運動・生活習慣の発達、つまづき、性の問題)

園・学校・地域での様子や心配事：子どもの友達関係 (いじめの対象・友だちができない、暴力・癩癪)、教員との関係、算数・作文・体育などの学業不振、学校での行動の問題、学校嫌い、不登校・登園しぶり

親子関係：

親子関係 (遅れて出現した甘え、思春期の反抗など)、子どもとのかかわり、問題行動等への対応

親自身の対人関係・隣人関係：

家族のこと (夫、子のきょうだい関係、きょうだいの問題、舅姑との関係、家族の病気など)

園・学校・地域との関係：保育者・教師との関係 (子どもの理解の有無)、親同士・近隣との関係 (子どもの理解の有無、子どもの障害や特性をどのように伝えるか)

自分自身について：

育児をめぐる母のストレス (子どもへのイライラ、夫との意見の違いなど)

自分の価値観 (子どもへの障害受容、子ども観・養育観・人間観について)

カミングアウト・告知：

親類や隣人等への障害のカミングアウトの是非 (子どもへの自我発達に伴う)

本人への障害の告知の是非 (子どもへの自我発達に伴う)

情報交換：

就園・就学・進学を進め方について (園や学校選び、障害について告げるかどうか、普通学級か支援学級か支援校かの選択、通信制サポート校について、進学・就職について)

サポートブックについて (必要性、作り方、作って良かったこと)

育児支援 (デイサービスなど) ・学習会などの情報交換

病院、相談機関 (診察、発達検査・知能検査などのこと、障害手帳の発行について)

その他、自身の就労など

ゲーム依存、第二次性徴・性教育、友人関係、いじめ、不登校傾向、不得意科目、思春期の反抗とその対応、子ども観・養育観の見直し、本人への障害の告知、中学・高校等の学校選び、サポートブック、将来の障害手帳発行についての情報などが特に学童期・思春期特有の問題と言える。

(4) 「子育て教室」と自主サークルの「母の会」における、支援者の果たした役割

各回を通したスタッフの役割について、項目にまとめると以下のような内容になる。

ピア支援者の役割

- ・親の立場の経験を活かして、自らの経験を話す。
- ・親の立場の経験を活かして、親を（共感的に）理解する。
- ・親の立場の経験を活かして、具体的に意見・助言する。
- ・育児情報交換のきっかけ作り（情報提供）
- ・リーダーシップを発揮して、地域での交流のきっかけを作る。

専門家の役割

- ・専門家自身を始めとして、すべての親が安心して率直に発言できる場作りをする。（カウンセリングの3つの態度条件：自己一致、受容、共感的理解に基づいた行動に心がける。）
- ・親同士の相互支援をファシリテートする。
- ・保護者自身の主体者としての変容を支援する。（親のエンパワメント）
- ・各々の専門性を活かした立場から発言する。（直接的具体的な指示ではなく、考え方の枠組みを示して、親が自分なりに決定することをサポートする。）

保育士：保育場面での子どもの具体的姿、保育で保育者が大切にしていること、子ども同士の関係について、集団の中での子どもの成長について、必要に応じて発言する。

心理の専門家：心や行動の成長発達の本筋や意味について必要に応じて発言する。

- ・他の社会的資源の情報提供をする。
- ・会の運営・継続に際して反省的实践者として機能する。
- ・教育・福祉の人間観（子ども観・養育観・教育観）に開けた態度を持つ。

その他、グループ全体で一つ一つの問題を共有し、一人一人の保護者が自らと子どもについて話すだけでなく、他の保護者の疑問や不安・喜びに耳を傾け、自らの意見や考え心情などを少しでも発言できるように配慮し、また、グループ外での地域での保護者同士の交流が広がるよう支えている。

（5） 親グループの対話の内容についての考察

常に、様々なテーマが対話の中で話されるが、特に、就学問題（学校、学級選び）、障害手帳の発行、障害のカミングアウトや子どもの自我発達・自意識の発達に伴う本人への障害の告知の問題は、個々の子どもの成長に伴い必ず繰り返し話題となるテーマである。いじめ問題、反抗期、ゲームへの熱中、性の問題なども年齢が上がるにつれ度々話題に上る。

このような話題は、親の子ども観・養育観・教育観が反映される話題であり、様々に異なる意見も含むグループで話し合う意義は大きいと思われる。互いに乳幼児期からの親子とその関係を知る親同士（支援者を含む）の率直な対話を通して、子どもの成長に伴う変化（自立の様々な現れ）が、個々の違いはあっても、多様な子どもに共通の課題であることを認識し、現実の子どもと親子関係を見直し今の子どもに信頼を置く子ども観・養育観や養育態度へと変化しようとする様子が見えてきた。

（6） ピア・スタッフを含むピア・グループサポート（仲間による相互支援）の意義と成果についての考察

発達障害児の育児支援は、家族のメンタルヘルスや二次的障害のリスク防止の発想を土台として、早期の子ども理解と特性に応じた育児方法のコツを学ぶことを目的にしているものが多いと思われる。そうした支援は必要な場合もあるが、一方で、その初期の困難な時期が過ぎた後には、何が得られたか以上に、日々新たに生まれる育児の悩みを相互に支え合う関係が日常的に継続し続けることが、むしろ保護者を励ますものとなったりする。

上記のような考えに基づき、当事者主体の相互支援関係が地域において成熟することをねらいとし、支援者は支持的受容的支援を行うと共に相互支援のファシリテーターとしての役割を取り、相互支援関係が成熟するよう努めてきた。そのような中で、母親たちが親としての自信（子どもや自分自身への気づき・肯定感）を得るだけでなく、他の新たな仲間に対しても、身近な育児の先輩として支援者の役割を主体的に担い、子育て仲間として相互に交流する関係を形成させた。さらに、自主サークルを結成・運営し、地域において、子どもを育む環境の改善を目指す支援の主体者グループとしても機能するに至った。

このグループの中で当事者の母親が語った言葉は非常にシンプルだが説得力のあるものもある。例えば、「今できるようになったことを認めて、周りとは比べないで。」「必ず伸びる、先を見ないで今を大切に。」「子どもにも自分にもハードルを上げすぎないで、気楽に。」「先生を敵に回さずうまくやる、ありがとうの気持ち。」「イライラして虐待しそうになるので辛いのがよくわかります。」「これらは、同じ立場の母親からの心からの発言であるだけに、受け手に響き、そうした言葉を投げかける存在に励まされ、「自分たちもやっていける」と思える勇気を与えるように思われる。

ピア・グループサポートによって育まれるもの、すなわち成果は以下のようにまとめられるだろう。

- ・仲間の様々な異なる意見を知ること、保護者の子ども理解や自己への気づきが深められる。
- ・仲間の経験を聴くことで、これから自分や子どもが進む先の姿を想像できたり、視野を広げたりできる。
- ・グループ全体で話題を共有し、自己の発言に対する他者からの反応を得ることで、保護者の自己理解と安心感・自信（自己肯定感）が育まれる。
- ・仲間に話をして理解されることで、安心感を持ったり一人ではないと勇気づけられたりする。

- ・自分の経験を話すことが相手にとって役立つことを知ることで、自信につながる。
- ・サポートする側にもされる側にもなれる関係が築かれる。
- ・グループでの対話により保護者の他者理解が促進され人間関係の力が育まれる。(相互支援、社会性の成長)
- ・保護者が環境に働きかける主体者に成長する。(親と子の交流と相互援助を目指す自主サークルが母親によって設立・運営されるに至った。)
- ・発達障害児が地域の中で育ていける環境をつくる。

ピア・グループサポートは、子育てを学び合い、安心と共感と協力を育むだけでなく、保護者が主体者として自ら環境に働きかけ地域を変革して行く存在になることをも可能にすることが、この実践経過から示されたように思われる。

(7) 今後の課題について

育児におけるピア・サポート(仲間関係による相互支援)の実践は、一般乳幼児の地域子育て支援において広まりつつあるようであるが、学齢期以降のサポートシステムは整っていない。しかし、現実に学齢期以降も多くは保護者が、成長発達に伴う子どもの変化や子育てについて共有し、学びあえる場を求めているのは否定できない。例えば、マスメディアによって取り上げられている育児情報の年齢範囲が広がりつつあることは、そうしたニーズの現れである。特に、就園・就学後も支援を必要とする発達障害児の青年期以降を見通した持続的で主体的なピア・グループサポートの実践と研究の蓄積はさらに必要とされるであろう。例えば、就学問題は、子どもにとってのみならず、親にとっても人生の大きな選択となる重要な出来事である。「周りの子供がみんな喜びに満ちて入学式を迎えるのに、私は、心配と不安の方が先立って、入学式なのに嬉しい気持ちになれなかった」とピア・グループサポートの中で話した母親があったが、そうした発言も含め経験者の体験を聞き共有し、いざとなれば身近に相談できる頼れる仲間がいるというというだけでも、どれほどの安心感が得られるだろうか。

子育てに関する様々な課題が山積する現代日本社会において、ライフサイクルを通じた家族への支援を当たり前のものとして、地域に根づかせ継続させるための条件を検討していくことが今後必要であると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

幸 順子: 母親の育児意識に関する研究-子育て支援利用者の自由記述-. 名古屋女子大学紀要第 63 号(人文・社会編), 2017, 393-403

幸 順子, 竹澤大史: 発達障害児の地域における育児支援に関する研究-乳幼児期から思春期に至る親のピア・グループサポートの歩みから-. 名古屋女子大学紀要第 64 巻(人文・社会編), 2018, 419-427

〔学会発表〕(計 1 件)

竹澤大史, 幸 順子: 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピアグループサポート参加者へのインタビュー調査から 5-. 日本発達心理学会代 27 会大会(札幌)2016.4.30 [図書](計 3 件)

幸 順子: 乳幼児の臨床心理学-子どもを理解するためのカウンセリングの基礎知識. 名古屋女子大学短期大学部保育学科編, 幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために. 西村印刷株式会社, 全 236 頁, 2017, 190-196

幸 順子, 二村郁美: 子ども子育て支援の現状と課題. 名古屋女子大学短期大学部保育学科編, 未来を見据えた保育者を目指して. 鳴海出版, 全 270 頁, 2018, 50-60

竹澤大史: 障害のある子どもの家族支援. 漆葉成彦・近藤真理子・藤本文朗編著, 発達障害のバリアを超えて-新たなとらえ方への挑戦-. クリエイツかもがわ, 全 223 頁, 2019, 168-178 [産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 竹澤 大史 (TAKEZAWA, Taishi)

ローマ字氏名: TAKEZAWA, Taishi

所属研究機関名: 和歌山大学

部局名: 教育学部

職名: 講師

研究者番号(8桁): 80393130

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。